

## 家庭教育における「幼小接続」の視点

——小学校就学前の家庭教育に関する提言——

● 矢野 徹 [Benesse 教育研究開発センター 研究員]

2 005年1月の「幼小連携の強化」を柱とした、  
中央教育審議会（以降、中教審）の答申以降、

幼児期の教育改革が積極的に検討されている。

幼児期の教育には小学校の学習の基盤づくりという側面もあるが、  
それは決して知識の習得に偏重した早期教育ではないはずである。

Benesse 教育研究開発センターでは03年度より

「小学校での学力向上につながる幼児期の学びとは何か」に関して  
教師・保育士、大学の研究者との共同研究を行った。

その3年間の取り組みを紹介する。

### 「幼小接続」が積極的に検討されている理由

04年9月に文部科学大臣より義務教育に関する改革案が提案され、05年1月に中教審は「幼小連携の強化」を柱とする答申を提出した。行事の合同実施や教員の人事交流、さらには幼小一貫教育校の設置などが検討され、05年度からは全国で「幼小連携推進クラス制度」の導入、「幼小連携アドバイザーのいる幼児教育支援センター」の設置が始まっている。

このように義務教育改革において「幼小連携」が重要視されている一因には、多くの子どもたちが小学校入学直後から「小学校生活への不適応」を起こしていることがある。「教師の話を静かに聞いてもらえない」「授業中に勝手に教室の外へ出歩く」などの問題行動によって授業が成立しないという現象が全国の小学校現場で生じている。事実、複数の自治体では授業中に騒ぐ子どもをなだめたり、出歩く子どもを連れ戻したりするための補助スタッフを確保する制度を作っている。

背景には社会構造の急激な変化に伴う「地域社会及び家庭の教育力の低下」がある。集団での生活や学習に上手に溶け込むことができない子どもたちの存在は、小学校における学習指導の停滞、ひいては子どもの学力低下要因の一つと考えられている。この児童期の教育課題の解決のために、幼児期の教育との連携が期待されているのである。

### ベテラン教師の考える、

#### 小学校で伸びる子どもと伸び悩む子どもの違い

幼児期の教育改革を検討していく上で最初に必要なのは、「小学校に就学する段階で子どもたちがどのような状態になっていることが望ましいのか」というゴール（達成）イメージを明確にしておくことである。

Benesse 教育研究開発センターでは教育に関する調査研究活動を長年行っているため、全国から講演や研修の要請が多数寄せられる。中でも最近増えているのが小学校のPTA 講演の依頼である。そうした講演を受けることは、企業の社会貢献活動という側面と同時に、実は講演を機に依頼者である学校・PTA 会との情報交流が始まり、教育現場の実情が継続的に把握できるといった付加価値も生じている。

今回の研究の一環として、情報交流のある複数の小学校で「小学校で伸びる子どもと伸び悩む子どもの違い」に関してベテラン教師を対象にヒアリング調査（結果データ非公開）を行ったところ、非常に興味深い傾向が見られた。幼児期の教育改革を検討する上で示唆に富む内容であったため、（教師側からの主観的な見方であることを最初にご了解いただいた上で）その一部を抜粋して報告する。

図表 [1] 小学校入学後に伸びる子どもの特徴

<p>■ 教師の指導や指示をうけるときの</p> <p>① 目を合わせて話を聞いている 授業の大半は言葉で行われるため、聞ここうとする姿勢が重要。</p> <p>② 指導や指示の内容を理解しようとしている 指示通りにだけ行動している子どもは判断力・思考力が育ちづらい。</p> <p>③ 自分で判断し、行動しようとしている 何でも指示待ちではなく、自分で考えて前に進む子どもが伸びる。</p>	
<p>■ 友だちと遊んでいるとき</p> <p>① 同じ遊びが長続きする すぐにあきたり、途中で投げ出したりするタイプは伸びない。</p> <p>② 行動や発想がユニークである 周囲と同じことをしていても、時々、独自の違う動きをする。</p> <p>③ 周囲の動きが見えている 視野が広く、状況を把握し、周囲に感わされずに行動できる。</p>	
<p>■ 家庭環境</p> <p>① 家庭の雰囲気が穏やかである 精神的に安定して過ごせる家庭環境にある子どもは伸びる。</p> <p>② 睡眠が十分とれている 夜更かしや朝寝坊が半ば習慣化している子どもは伸びない。</p> <p>③ 食生活が健全である 偏食が容認され、栄養摂取が偏っている子どもは伸びない。</p>	

Benesse 教育研究開発センターがベテラン小学校教師を対象に行った「小学校で伸びる子どもと伸び悩む子どもの違い」についてのヒアリング調査結果より

● 問1『子どもが何年生になれば、その後、伸びる子どもと伸び悩む子どもの違いが予測できるのか』

「3年生（低学年では早生まれかどうかの差が大きい）」  
 「5年生以降（この時期から心身とも大きく変化するため）」と  
 いった回答もあったが、最も多かったのは「1年生」であった。理由としては「状況・場面に応じた子どもの考え方や行動が把握できればほぼ予測できる」、「保護者を知り、家庭環境などの様子が分かればほぼ予測できる」という声が多かった。

● 問2『日常の生活のどこを見れば、その後、伸びる子どもと伸び悩む子どもの違いが予測できるのか』

学習習慣に関しては「きちんと身に付いている子どもは伸び

図表 [2]

研究結果資料（「ベテラン幼稚園教師・保育士の経験に学ぶ【幼児の子育て】のポイント」より抜粋

※第1章では0歳児から小学校就学までの幼児の発達状況を時系列で分析している。（重視した3～5歳児の3か年は1か月単位）

〈内容例〉

5歳/4月	
指導観点	<ul style="list-style-type: none"> <li>○年長組になった喜びを感じさせ、友だちや保育者とのつながりを楽しませる。</li> <li>○新しい環境に慣れさせ、友だちや保育者と一緒に生活のリズムをつくらせる。</li> <li>○年少児の世話を通して頼りにされるうれしさを感じさせる。（以下略）</li> </ul>
心理状態	<ul style="list-style-type: none"> <li>○クラスや担任が変わった不安や戸惑いを甘えたり、登園をぐずったりして表す。</li> <li>○年少児の世話を相手の反応（ぐずる、自分でやると言われてしまう、など）に戸惑いながらも張り切ってやろうとする。（以下略）</li> </ul>
保護者の役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>○クラスや担任が変わり、気持ちが不安定になり緊張が見られる。子どもの話をよく聞き、ゆったりとかかわることで子どもが安心感を持てるようにする。</li> <li>○新しい学年で友だちができていく心配でも、しつこく聞かず、子どもが話しかけてきた時にじっくりと話を聞くように心がける。</li> <li>○年少児の世話で登園が早くなり、生活のリズムを作るチャンス。登園1時間前には子どもが起きるようにする。（以下略）</li> </ul>
家庭にて	<ul style="list-style-type: none"> <li>○担任が変わった場合は特に家庭での様子を伝え、担任との信頼関係を築く。</li> <li>○家庭でも年長児としての意識をもたせて、自分でやる身支度や手伝いの内容を向上させていく。（弁当箱を布で包む・上履きを洗うなど）（以下略）</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>○年長組の保護者として年少組の保護者の世話や父母の会などの活動に積極的に参加する。保護者同士がつながるように働きかけていく意識をもつ。（以下略）</li> </ul>

（当然ながら、幼児の発達には個人差があり、また同じ発達段階が一定期間継続することも多いが、月単位での分析という試みを優先した便宜上、最も標準かつ顕著な月に該当内容を記載している点をご了解いただきたい。）

やすい。しかし、身に付いていないからといって伸びないとは断言できない（今後の教師の指導で改善できるから）」という回答結果になった。ところが、「生活習慣がきちんと身につけていない（挨拶ができない・遅刻が多いなど）」「保護者とのコミュニケーションに問題がある（過保護・過干渉・放任など）」に関しては、ほぼ全員が「子どもの学力の伸びと非常に高い関係がある」と回答すると同時に、それを学校で補うことも、学校から保護者に働きかけて改善していくことも現実的には非常に困難であるという意見が多かった。


このヒアリング調査結果の「伸びる子どもとその保護者・伸び悩む子どもとその保護者の行動の特徴」を整理したものが図表1である。幼児期の家庭内での保護者の働きかけが、児童期の伸びの大きな鍵を握っていることが改めて確認できる。

図表 [3]

研究結果資料 (「ベテラン幼稚園教師・保育士の経験から学ぶ【幼児の子育て】のポイント」) より抜粋

※第2章では幼児たちに共通する幼児独自の言動 (30項目) を選び、その意味を分析している。

幼児たちに共通する言動30項目 (内容例)

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ふざけ</li> <li>2. こだわり</li> <li>3. おどけ</li> <li>4. けんか</li> <li>5. 甘え</li> <li>6. 噛みつき</li> <li>7. 基本的信頼感</li> <li>8. 自我の芽生えと発達</li> <li>9. 思いやり</li> <li>10. 恥の意識</li> <li>11. ユーモア</li> <li>12. 劣等感</li> <li>13. 欲求不満</li> <li>14. うそ</li> <li>15. だまし</li> <li>16. いざこざ</li> <li>17. 我慢・抑制力</li> <li>18. はにかみ</li> <li>19. 仲間意識</li> <li>20. 指ししゃぶり</li> <li>21. 道徳性の芽生え (葛藤も含む)</li> <li>22. 同一視・同一化・同調行動</li> <li>23. 象徴機能の発達</li> <li>24. 育ち合い</li> <li>25. ルールや決まりの理解</li> <li>26. アイ・コンタクト</li> <li>27. 協調性</li> <li>28. 知的好奇心</li> <li>29. 預かり保育</li> <li>30. 課題意識</li> </ol>	<p style="text-align: center;">6. 「噛みつき」</p> <p style="text-align: center;">&lt;成長発達にとっての意味&gt;</p> <p>言語がまだ十分に使いこなせない時期にもすでに他者とのコミュニケーションを楽しみたい子どもたちです。大人とは大人側からの問いかけに対して答え自分なりの言葉で問いかけるなど、言葉を変えたり欲求や要求を実現できても、子ども同士ではまだ難しい段階です。自分の思いが相手に伝えられない時、伝わらない時に、噛みつきは状況を変化させるには最も効果的です。噛みつくとも相手は泣き大人が来てくれる。その様子を見て真似をする子どもも必ず出てきます。他者へのメッセージがあふれているものの言語では表現しにくく、伝わらないもどかしい気持ちが噛みつきという行為に現れているようです。</p> <p>多くは乳児から幼児前期に多く見られますが、5歳頃になっても、時には友だちの腕や背、足に噛みつくこともあります。この噛みつきは、小さい子とは違い、感情的ないきちがいやくやしい気持ちが高じて相手を攻撃するときに多く見られます。5歳児になれば相当に言語が発達するとはいえ、感情もトラブルの原因も複雑になり互いに十分に伝えきれず、伝わりきれずという状態も見られ、いきおい、つかみ合いのケンカの末に噛みつくということになります。相手を排除する気持ち、相手の存在を拒否するという強い気持ちの時おこることがあります。こうなるとトラブルの要因や背景を修復するには一筋縄ではいきませんが、分り合えば相手のことを受け入れるのも早いのが5歳児です。いずれにしても噛みつかれた子のいたみと、噛みついてしまった子のやり場のない気持ちや周囲の大人が受け入れてあげることが、次第に噛みつきをなくしていきます。</p> <p style="text-align: center;">&lt;子どもの姿&gt; 「いたかったネー」</p> <p>仲良く絵本を見ていた1歳児クラスのアキラとマリコ。保育者に読んでもらっているが、「ネー」と顔を見合わせてはニコニコ笑いあっています。読み終わった絵本を二人でめくりながら見合っている。ほほえましく思いながら、その場を保育士が離れたとたん、「ワーッ」と泣き声が、どうやらアキラがマリコの背中に噛みついてしまったらしいのです。マリコの背中にはくっきりと痛々しく噛み跡が残っています。マリコが泣き保育士がとんできたのおどろき、アキラも泣き出してしまいました。</p> <p>保育士は、二人をひざにのせながら「マリコちゃんいたかったねえ。アキラちゃん、マリコちゃんとお話したかったんだって。」と伝え、アキラには「マリコちゃんいたかったんだよ、噛んじゃだめだよ」とそれぞれに伝えています。二人は、保育士のところでなくさめられた、また遊び始めました。速くから見ていた別の保育士が、「アキラちゃんが、マリコちゃんにネーネーとさかんに声をかけていたんだけどマリコちゃんはその時は別の本を見ていて気づかなかったみたい。」とのこと、その保育士も止められないほどあつという間のできごとでした。</p>	<p style="text-align: center;">&lt;指導及び援助のポイント&gt;</p> <p>噛むことがいけないことは確かですが、だめと叱るより、大人が子どもの気持ちを的確に表現してあげることが効果的です。噛まれた側には「痛かったねえ。でもお話ししたかったんだって」と、噛んだ側には「とっても痛かったんだよ、噛んじゃだめだよ」とそれぞれ気持ちを代弁して、それぞれに伝えることが大切です。また1～2歳の頃は、困ったら保育士のところに来るように伝えるなど、噛まなくても済む方法を具体的に教えてあげることが一つです。また、保育の場では、トラブルが起きないように玩具や道具の設定、生活動線を工夫することも大切です。言語を急速に獲得していく1歳代は、他者とのコミュニケーションへの関心・意欲を十分にほぐくむこと、他者の気持ち・本人の思いなどを的確に代弁してあげることが非常に大切です。大人も言葉を選ぶ必要があります。4.5歳では友だち関係が良好であれば、相手を傷つけるようなことはありませんが、情緒面での発達の遅れがあったり、学級中での自分の存在に不安を感じたりすると、感情の表出が荒々しくなることがあります。噛みつくことがいけないこと、相手を傷つけることはいけないことがわかるように話すことも大切ですが、一方で噛みつくという行為をせざるを得ない心情や背景にも目を向けることが必要です。さらには相手の痛み(傷の痛み・心の痛み)が互いに感じられるような助言も大切です。年齢の低い子どもの場合、すぐにはわからないだろうと思ったことも、繰り返し伝える中で分かるようにしていきたいものです。教師や保育士と学級中での友だちとの関係、家庭での親子・きょうだい関係、また、情緒面での発達を把握し、家庭と園が連携を図りながら情緒の安定を図っていくことが大切になります。</p> <p style="text-align: center;">知っ得</p> <p>噛みつきという行為も子どものサインの一つ、子どもとかかわりや、普段の生活を振り返ってみましょう。何歳であってもし一人一人の子どもが気持ちよく過ごされ、安定しているかどうかを体調と共に把握しておくことはとても大切です。</p> 
--	---	---

小学校就学までの時系列で見る幼児の発達

幼児期は生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期であり、その後の人間としての生き方を大きく左右する。だからこそ、幼児期の教育内容と小学校以降の学びが連続性を持っていることが重要である。小学校で学ぶ国語や算数、道徳などの教科・領域としっかりつながり、「確かな学力」の基盤が培われている状況になってこそ、幼小接続が本当の意味で成功したといえる。

では、小学校の学習の基盤を構築するためには幼児期のどの時期にどのような教育を行うべきなのか。そのことを検討するためには、最初に幼児たちの発達の特徴を時系列で把握しておくことが不可欠である。当然ながら、この点に関して科学的観点から正しい効果検証を行うためには、少なくとも5～6年以上をかけた一定規模の母集団での追跡調査が必要である。しかし、幼児対象の調査は被験者の年齢の問題もあり、サンプル数確保

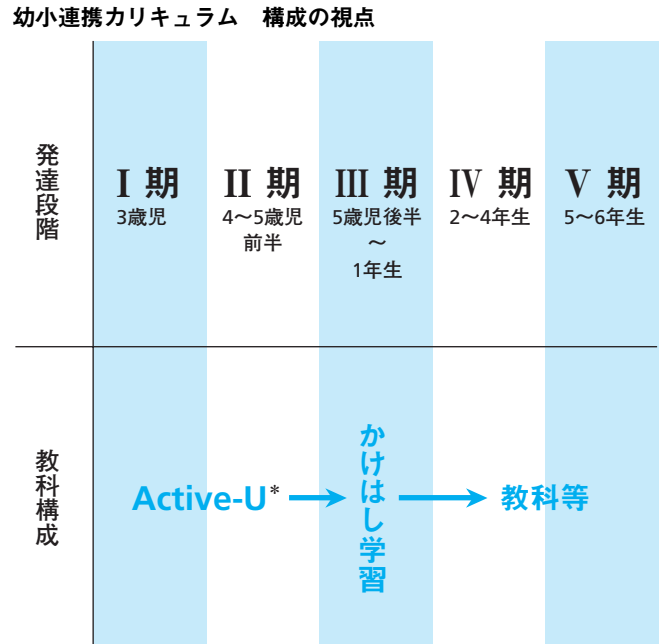
が非常に困難である場合が多く、基準として広く共有されている既存の研究成果はほとんどない(これは日本国内だけではなく、海外の研究も同様である)。

そこでBenesse教育研究開発センターでは03年度から幼児教育・保育の現場に精通しているベテランの幼稚園教師・保育士との共同研究を進めてきた。0～2歳児は「①保育のねらい」「②身体運動的発達」「③情緒的発達」、及びその時期に保護者が理解しておくべき留意点を4～6か月単位で明らかにした。重点時期である「3歳児以降～小学校就学まで」の3年間は、「①幼稚園・家庭での指導内容」「②子どもの意識・心理状態」、さらにその時期における「保護者としての留意点・役割」「子どもをサポートする際のポイント」を1か月単位で分析した(P.43、図表2)。

多くの専門家が幼小接続期の問題点として、「小学校に入学すると幼児期を見ていない教師により最年少の幼い存在として扱われる。そのことでせっかく育ちつつあった意欲が低下してしま

図表 [4] 岡山大学教育学部附属小学校の取り組み「かけはし学習」～子どもたちを勉強嫌いにしないカリキュラム～

実施の背景	
①	学習内容に興味がなく、学ぶ必要性も理解できない子どもには強い学習意欲は育たない
②	子どもが学習内容に興味・関心をもち、学ぶ必要性を感じることが何よりも大切である
③	幼小の学習スタイルの違いが、子どもを戸惑わせ、積極的な学習を阻害している
④	小学校1年生の1年間は、幼稚園の「遊びの中の学び（環境の中で統合的に学ぶ）」に似た活動を実施することで小学校の学習への違和感を取り除く
⑤	「かけはし学習」の実践により、子どもの学習への意欲的な取り組みを円滑に実現する



\* 暮らしの中に存在するさまざまな価値を「遊び」の中で総合的に学ぶ幼稚園の活動単元 (岡山大学教育学部附属小学校作成資料より抜粋)

う」ということを指摘している。6年生の指導もする小学校の教師にはひどく幼く感じられる1年生も、幼児期からの一貫した視点で見れば確かな成長の跡が見えるはずである。学校段階の枠ではなく、子どもの発達に合わせた指導が重要なのである。

第1期（03年度）の研究活動を通して、幼児期には時期によりさまざまな発達状況の違いがあることが確認できた。そして、幼児教育にはその発達状況に応じた適切なアプローチが必要であることも再認識できた。同時に新たな課題として、幼児独特の言動の持つ意味が保護者に十分理解されておらず、親子の密なコミュニケーション（家庭教育の土台）を阻害している実態も明らかになった。

例えば、幼児の「ふざける」「うそをつく」「囁みつく」などの行動の意味を若い保護者はどう理解し、どのように対処すればよいのか。また、「道徳性」「協調性」などはどのような場面で育てていけばよいのか。これらの概要を明らかにすることも、新しい幼児期の教育を検討する上で重要であると考えた。そこで第2期（04年度）は幼児たちに共通する言動の中から、特に重要と判断した30項目に関して、「① その言動がもつ幼児の発達にとっての意味」「② 具体的エピソードにおける指導のポイント」を分析した（図表3）。

「遊びを通した学び」から「教科学習」への円滑な接続

03～04年度の幼児の発達に関する基礎研究を踏まえ、05年度は「幼児期の学びが小学校の学習にしっかりとつながっていくためのカギは何か」という研究を開始した。

多くの保護者は子どもが幼いうちはのびのび育てたいと願っているが、学力の低下や二極化といった報道が繰り返されると、「のびのび」が「のんびり」になっているのではないかと不安になり、早期教育へ関心を高めていくようだ。しかし、知識習得を目的にした学習では学ぶことへの興味を高めるどころか子どもの勉強嫌いを引き起こしたり、学校の授業を聞いても「そんなことはもう知っているよ」とばかりに授業を軽視したりと、かえって子どもの学力向上を阻害してしまう場合がある。幼児期の学びの最も大切な目的は、子どもの知的好奇心を育み、学びへの意欲を高め、さまざまな日常体験を豊かに重ねさせておくことである。この点に関して大変参考になったのが、全国でも先進的な幼小接続研究を実践している岡山大学教育学部附属小学校の取り組み、「かけはし学習」である（図表4）。

「かけはし学習」は「子どもたちが日常生活や遊びの中から『学び』を見つけ出し、その中から深い学習内容（『言語』『徳性』『数量』『表現』『メディア』の5テーマ）を取り出して、自ら興味

**図表 [5]**  
**研究結果資料(幼小接続期の「遊びを通した学び」)の100の事例より**  
**〈内容例〉**

事例	気づきや経験した事柄
<p><b>【綱引きをしたいけど】</b></p> <p><input type="checkbox"/>年齢:5歳児  <input type="checkbox"/>場面:幼稚園  <input type="checkbox"/>時期:11月上旬</p> <p>園児たちは「綱引き」をしたくなり、綱を用意して、赤と白の2組のチームに分かれたところで、赤チームのマサキが、白チームのヤスマサに声をかけました。</p> <p>マサキ 「そっちのチームは何人いるの?」  ヤスマサ 「8人。そっちのチームは?」  マサキ 「7人。こっちは一人少ないから損だよ。そっちは誰かひとり応援する人になって」  ヤスマサ 「そっちに誰かもう一人入れればいいじゃん」  マサキ 「でも誰もいないよ」</p> <p>(誰も抜けたがらないので、みんなが困っている)</p> <p>タカマサ 「そうだ、先生に入ってもらおうよ!」  園児たち「それがいい!」</p> <p>言い出したタカマサが先生を呼びに行き、1人少ない赤チームに入ってもらいました。両チームが無事、同人数になったことで全員が納得し、やっと「綱引き」が始まりました。</p>	<p>■数の均等・量の均等</p> <p><input type="checkbox"/>数を数える  <input type="checkbox"/>数の比較(人数の違いの理解)  <input type="checkbox"/>1対1対応の概念  <input type="checkbox"/>意見を出し合う</p> <p><input type="checkbox"/>調整の必要性</p> <p><input type="checkbox"/>解決のための方法を思いつく  <input type="checkbox"/>友だち(他者)の考えを理解し、認める</p> <p><input type="checkbox"/>人数の差の不合理には気付く  <b>■人数が合えば、質の違い(大人と子どもの力の差)までは問題点として認識できない</b></p>

や関心をもって学んでいく」ように導く取り組みである。それぞれのテーマに沿って、多様な取り組みが小学校1年生のすべての授業を通して通年で実施されている。幼稚園で学んだ内容を発展させ、それを小学校での教科学習の基盤として構築するためには、どうしても幼児教育と小学校教育の二つの領域を滑らかに接続する新しいステップを生み出す必要があったのだ。

実際に「かけはし学習」を視察し、また研究主任にレクチャーをしていただくなどの情報交流を進めるうちに、「遊びの中の学

びと教科学習の円滑な接続(遊びを通して子どもの学びへの興味・関心を引き出し、それを教科学習に円滑につなげていき、積極的な学習意欲を育む)」という幼小接続の発想は、学校教育だけではなく家庭教育の場でも十分に活かせることに気が付いた。

多くの保護者は勉強という教科学習のイメージを強く持ち、「遊びを通した学び」といわれてもピンと来ないと思われる。しかし、実は「遊び(日常生活の中で子ども自身が興味を持ち、夢中になること)」の中には小学校以降の学力向上につながる多くの学びの種が潜んでいる。そのことを具体的に明らかにし、「遊びを通した学び」の重要性を保護者が理解できるようにすれば、幼児の発達段階に適応した新しい幼児期の家庭教育につながるのではないかと考えた。

05年度はベテラン幼稚園教師・保育士との研究会を拡大し、幼児の日常生活(自然観察や「ごっこ」遊び、保護者や友だちとの会話など)の中に潜んでいる、教科学習へつながる体験や気づき、意欲などの芽を100の事例としてまとめた(図表5)。

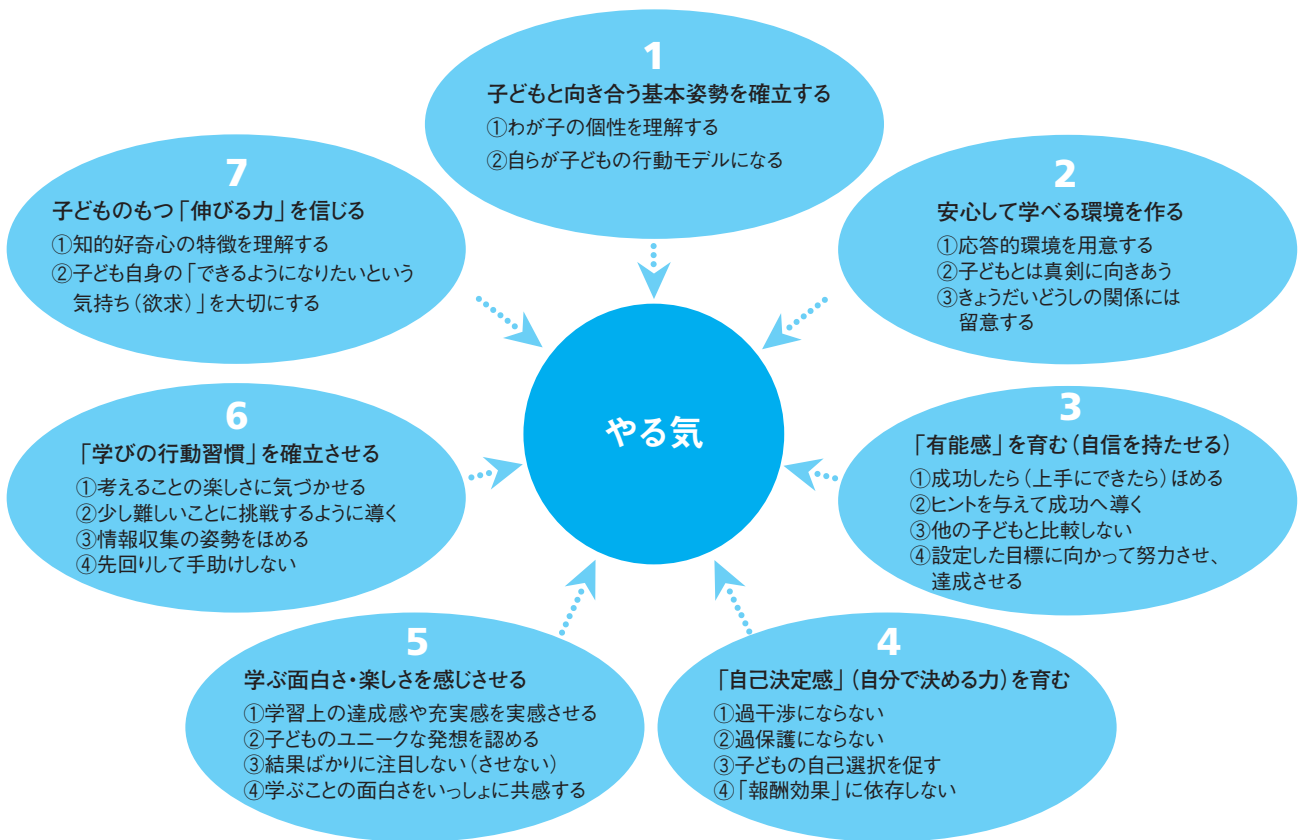
この事例集の分析結果を見た若手・中堅の幼稚園教師からは、「毎日の幼児たちとの何気ない遊びや会話の中に、これほど教科学習につながる内容があることを知り驚いた」との意見が多く聞かれた。

**幼児期から継続して家庭で育てる「学びへの意欲」**

中教審・義務教育特別部会は「学力低下の背景には子どもたちの学ぶ意欲の低下や学習の動機付けの乏しさがある」として、「何のために学習するのか」を子どもたちに考えさせる必要性を提言した。詰め込み教育への反省から「ゆとり教育」は子どもたちの学習意欲を重視したが、学習意欲は放っておいて自然に育つものではない。一人ひとりの子どもの成長に合わせた適切なサポートが不可欠である。ところが、意欲は目に見えず、客観的に測ることができないため、教師が目標を設定して指導するという手法で成果をあげることは簡単ではない。(多くの学校が「総合的な学習の時間」の意義を理解しつつも、その活用に苦慮する理由もここにある。)

家庭教育に求められる大きな役割の一つが、学力向上のために最も重要で、時間のかかる、「学ぶ意欲の育み」である。ただし、そのためには保護者に対して「どのような場面で、どのように働きかけることがわが子の学ぶ意欲を高めることになるのか」に関して具体的な支援(アドバイス)が必要になる。

図表 [6] 幼小接続期に家庭で子どもの学習意欲を育むための7つの「カテゴリー」・23の「アプローチ」



幼児には「あなた自身の将来のために頑張りなさい」という理屈は通用しない。子どもがそれを理解できるのは、早くても小学校の中学年以降である。そのため、幼児期～児童期前半には報酬(ご褒美)や罰(叱責)による子どもの学習行動のコントロールが多用される。しかしこの方法だけに依存すると子どもの自発的な学習意欲を抑制してしまい、中高生になっても「やらされる勉強」しかできなくなる可能性が高い。幼児の知的好奇心を揺さぶり、その内発的な学習意欲(勉強すること自体が目的であり、「勉強って面白い。できるって楽しい」という喜びの実感)を育むことが重要なのである。

05年度はさらに筑波大学大学院の櫻井茂男教授(人間総合科学研究科・心理学専攻)と「幼児のやる気を育てるためのポイント」について共同研究を行った。「子どものやる気は保護者が家庭で育てられる」をテーマに、幼児の学習意欲を育むために効果的な方法を23のアプローチとして分析し、さらにそれらを大きく7つのカテゴリーに区分した(図表6)。

### 最後に

03年度から取り組んできた幼小接続期に関する研究活動では、数多くの幼稚園教師、保育士、小学校教師の方々から多大なご指導やご協力をいただいた。この場をお借りして改めてお礼を申し上げます。先生方が教育現場での日々の実践を通して得たさまざまな気付きは、この研究活動にとって非常に有益であり、今後も積極的に情報交流を継続していきたいと考えている。

Benesse教育研究開発センターでは、今回報告した幼小接続期の研究結果を踏まえて、保護者向けの講演活動や情報誌などで「家庭の教育力の再生」を提言している。学校教育と家庭教育は子どもたちの健やかな成長を支える両輪である。ベネッセコーポレーションが家庭の教育力向上に取り組むことが、公教育の支援につながることを信じて、今後もさらなる研究に取り組んでいきたい。